

【有形文化財（彫刻）】

薩摩川内市入来町の木造阿弥陀三尊像 附 木造僧形立像

○ 所在地

薩摩川内市入来町浦之名33番地（入来郷土館）

○ 所有者

個人

○ 概要・評価

阿弥陀像の材質はヒノキ材で、構造は寄木造、玉眼を嵌入しており、像高は78.2cmである。両脇侍像もヒノキ材の寄木造、漆箔で、像高は面部欠失像が47.1cm、もう一躯は49.5cmである。

本像は、秀麗な面立ちで、体部の衣文表現なども細部まで行き届いた造形である。制作されたのは、鎌倉時代13世紀半ば頃まで遡ると思われる。この時代の在銘阿弥陀像と比較すると、仁治3（1243）年銘・福岡県の仏師快成作の木造阿弥陀如来像に面貌表現や着衣の形状、衣文処理、構造ともに極めて相似しているため、本三尊像は、快成あるいはその工房で制作された可能性が考えられる。本三尊像とともに伝えられた木造僧形像（像高44.1cm）は、本三尊像にやや遅れて造られたとみられるが、作柄は優れており、鎌倉時代後期から南北朝時代（14～15世紀）頃造立であろう。

また本像は、通例の立像のように足裏に足柄あしぼぞを作らず、像底の円孔がんもりようじゆきょうに立てた柄で像を立てていたとみられる。これは足裏に仏足文を描くためとも、『観無量寿経』に説かれる空中に住立する阿弥陀仏をあらわすためとも考えられる。このように仏像に「生身しょうじん」性を付与する手法は平安末期頃から出現するとされ、鎌倉時代になると相当数が報告されている。

廃仏毀釈を免れた優れた鎌倉時代の彫刻としても、当時流行の先端であったとみられる「生身」性を付与された仏像の一例としても貴重なものである。



木造阿弥陀三尊像



木造僧形立像

○ 員数 4

○ 指定基準

絵画，彫刻の部

2 我が国の絵画・彫刻史上特に意義のある資料となるもの

4 特殊な作者，流派又は地方様式等を代表する顕著なもの

○ 未指定